

入選

坪内 アメノ(つぼうち あめの) 大和田小 3年生

作品名:赤毛のアン

図書:赤毛のアン

わたしがえらんだ本は、「赤毛のアン」です。カナダのプリンスエドワード島にすんでいたそうそう力ゆたかな赤毛の女の子の物語です。この本はわたしのおばあちゃんが小学生の時、読んで大すきな本なので、すすめられました。この本の中でわたしが一番大すきな所は、「なくなったブローチ」のお話です。

ある月曜日に、マリラが大切にしていたむらさき水しょうのブローチがなくなったのです。マリラはアンにブローチの事を聞きました。アンは、「さっきむねに、つけたけれど、すぐにタンスの上にもどしたよ。」と言いました。マリラはしんじてくれませんでした。「本当の事を言うまではピクニックに行ってはいけません。」と言われたアンは、どうしてもピクニックに行きたいので作り話しをしました。アンの作り話しはこうです。「友だちと、かがやく湖水でコーデリアひめの遊びの時にブローチを落とした。」と言いました。それを聞いたマリラはアンがうそをついてる事が分かりました。ますますおこったマリラは、アンをゆるしませんでした。その後マリラがショールを広げた時、何か光る物が目に入りました。ブローチが見つかったのです。アンはマリラに「わたしがわるかったよ。さ、早くピクニックのしたくをおし。まだ間にあうから。」と言われたので、ピクニックに行ける事が出来ました。

わたしがこの本を読んで思ったのは、うそはいけないけれど、アンは、どうしてもピクニックに行きたいからうそをついたのだと思いました。わたしはアンのようなそうそう力はありません。でも、もしアンのようにそうそう力があったら、かなしい事もつらい事もわすれられると思います。わたしはアンのようにそうそう力がほしいと思います。またアンのように、親切でやさしい人になりたいと思いました。もしわたしがアンだったらマリラといっしょにブローチを一生けんめいさがして、それでもなかったらピクニックをがまんしようと思いました。この物語でわたしはもう一つ大切な事を学びました。それはマリラは自分がまちがってたらすぐあやまった、事です。わたしは家族に、たまにしかあやまれません。でも外ではちゃん

とあやまれます。なぜ家ではあやまれないのか考えてみました。わたしはお父さんやおばあちゃんに同じ事をくりかえしちゅう意されます。そのためにあやまるタイミングがありません。これからは同じ事くりかえさないようにしてお父さんとおばあちゃんにちゅう意されないようにしてわるい事をしたらすぐにあやまろうと思います。わたしはテレビでアンの家を見ました。わたしはいつか、アンの家に行ってみたいです。